「よくお聞き。あんたの胎は地獄だよ」

ジプシーの占い師と向き合い、そろえた膝に手をおいてきょとんとする娼婦。

そこは砂漠の吹き溜まり、安普請のバラック小屋が傾いで立ち並ぶ治安の悪いスラム。

家々の壁には賞金首の手配書と大股開きのストリッパーのビラ、草の根布教活動として聖書のフレーズを印刷したポスターが無節操に貼りまくられている。

『汝隣人を愛せよ　しかるのち犯して殺せよ』

悪戯書きも放置されるがまま、ポスターはすっかり色褪せ破かれていた。

煤けた青空と乾いた砂が広がる荒廃しきった最果ての街で、ちびで痩せっぽちの少女はジプシーの老婆に占ってもらっていた。

生成りの天幕で仕切られた手作りの小屋には、六芒星のアミュレットやドリームキャッチャー、ビーズを連ねた飾りがじゃらじゃらと吊られて香が焚き染められている。

「あんたの子宮は悪の嚢だ。そこから悪魔の申し子が生まれるよ」

それを聞いた少女はどうしたか。

まず最初にびくりと身を竦め、神妙な面持ちでおそるおそる訊く。

「ええっと……性病にかかってるってこと？　赤ちゃんを産める体じゃない？」

「違うそうじゃない、今のは比喩さ。そっちは医者の専門だけど、将来的に出産はできるんだから、まあ健康なんじゃないかね」

「よかった、体に問題ないのね！　元気な赤ちゃんを産めるのね！」

最大の懸念が晴れて能天気に喜ぶ少女に、今度は老婆が困惑する。

不吉な予言をして、こんな反応を返されたのは初めてだ。

「いいのかい？　あんたは人様に憎まれ蔑まれる、この世に迷惑と災厄をまきちらす悪魔どもを生み落とす運命なんだよ」

それを聞いたいずれ母となる少女は絶望した？

憤激した？　悲嘆した？

一生男と寝ることなく子など産まないと決心した？

実際はどれとも違う。

目をきらきらと輝かせ、老婆の意地悪い予言を指折り数えて反芻する。

「『ども』ってことは一人じゃない？　やった、それって最高！　家族は多い方が賑やかで楽しいもの、兄弟喧嘩もできるのね！　みんなで寝るならはみ出しておっこちないようおっきなベッドを買わなきゃね、仲間外れは可哀想だもの。うーん、ちょっと固いけど床で寝ればいい？　雑魚寝も楽しそうよね、家族団欒よ。寝返りの時うっかり潰さないようにしなきゃだけど。ハンモックを吊るのもいいわね！」

あろうことか、少女はあっけらかんとこうのたまったのだ。

「教えてくれてありがとうお婆さん、少ないけれどお礼よ。おいしいものを食べてね。まっすぐ行って右の角のダイナーのハンバーガーがおすすめよ、犬の肉を使ってるって噂だけど味は悪くないわ」

「私の話を聞いてたかい？　その形よいオツムにゃちゃんと中身が入ってんのかい？　いいかいもう一度よくお聞き、アンタがこれから産む子は世間さまから忌み嫌われ人様に唾吐かれる悪魔の申し子だよ、絶対アンタを不幸にするよ。絶対孕むんじゃないよ、避妊を徹底するんだよ。トチったら針金のハンガーで引っ張り出すんだ。どのみちこんなくそったれた世界じゃろくな大人に育たないから産むだけ無駄無駄、手遅れになっても絶対自分で育てようとするんじゃないよ、へその緒を切ってすぐ里子にだすんだ」

「いやよ、私が自分で育てるわ。大体ハンガーはそんな使い方をするものじゃないわ、痛いし可哀想。ママはよくハンガーでぶつけどお仕置きに使うのも間違ってるわ、アレはキレイなお洋服を飾って楽しむためのモノよ、そういうプレイなら別だけど追加料金はきちんともらうもの。あ、ママっていってもホントのママじゃないのだけどね、お店じゃそう呼べって言われてるから。行くあてなく野垂れ死にかけた私を拾ってくれたんだから継ママでいいわよね？」

あっけにとられる老婆の皺くちゃの手に、ポケットをあさってほぼ一週間分の稼ぎに相当する皺くちゃの紙幣を握らせて、少女はにっこり微笑む。

痩せた頬に鼻梁に浮いたそばかす、せいぜい十代前半だろうあどけない顔立ち。

若いというより幼い。

垢ぬけない小娘だが、快活に輝く赤茶の瞳と生気に華やぐ表情が、成長と共に開花するだろう美貌の片鱗を予感させ

た。
しかし注意してよく見れば四肢の至る所に青黒黄の痣が痛々しく散らばっている。服で隠れた部位はなお酷い。上前をはねる元締めか、もしくはサディスティックな客の暴行の痕跡。顔にキズが見当たらないのは商売道具だから控えたのか。
栄養状態も悪い。
肋が浮く薄い胸、今にも折れそうな細腕からは、日々の食事にも事欠く劣悪な生活環境が窺い知れた。
別に珍しい話ではない。
少女が格別不幸なわけでも悲惨なわけでもない、同様に虐げられた境遇の少年少女はこの街に数多くいる。皆親に売られるか捨てられるかした行き場のないみなしごたちだ。
そんな子どもたちを利用し搾取し私腹を肥やす大人たちも、この街には数多く存在する。
少女もまたそんな腐った大人に飼い殺される一人で、用済みになればあっけなく捨てられるだろう。
この世界はとことん弱者に冷たくできている。
避妊の失敗でぽんぽん産まれる子どもなど養う余裕がないほど全てが枯渇しきってるのだ。
水も、資源も、食糧も。
愛も、平和も、良心も。
道端で膝を抱えて蹲るか、虚ろに立ち尽くす子どもたちと少女の唯一の違いといえば、表情の明るさと親切で善良な振る舞いだ。
クスリや酒に逃避しているわけでもない、今しがたの老婆の言葉がよるべない少女に希望を吹き込んだのだ。
少女は胸の前でひしと手を組み、ご機嫌麗しく歌うような節回しで、老婆に心からの感謝をささげる。
「おばあさん、私ね、それを聞いてとっても嬉しい！　私には近いうちに子供ができるのね、その子は無事産まれてくるのね。ずっとずっと一人だった私に家族ができるなんて、なんてステキ！　そんなラッキーニュースが聞けて今日はとびっきりのハッピーデーだわ！」
だしぬけに身を乗り出し、老婆の頬に派手なリップ音をたてキスをする。
もう何年もまともに人に触れられてない、接吻に至っては何十年ぶりだろうか？
通りすがりの人々は汚いモノでも見たかのように冷たく一瞥くれて去っていく。
こんな薄汚れた、皺くちゃに縮んだババアに好き好んでキスするなんて……

思い返せば手を握られたのも随分と久しぶりだ。
少女は一片の躊躇なく、一片の抵抗なく、人々に疎んじられる老婆の手を握りしめて感謝を伝えた。
薄く華奢な手のひらからはぬくもりと親しみ、老婆にながらく無縁だった誠意が伝わってきた。
この世界で廃れかけて幾星霜の美徳の残り滓のようなもの。
王子様のキスがお姫様の呪いを解くなら、悪い魔女の凍てついた心を溶かすのは、お姫様のキスだろうか。
邪悪で老獪な魔女の皮肉も、少女の天性の明るさの前でたちどころに霧散する。

無防備なまでに正しい。
無防備なまでに優しい。
今の時勢では生き辛いだけの稀有なる美質。

純粋無垢というか天真爛漫というか……暴力と犯罪の温床である底辺の街には似つかわしくない、童話の主人公のようなお花畑メンタリティだ。
今も路地一本隔てた暗がりで銃声と悲鳴が響く死と隣り合わせの日常で、明日をも知られない命だというのに、それでも少女はひからびて斑が浮いた老婆の節くれた手を温かく包んだ。

打算を一切含まないスキンシップ、ただしたいからそうするという直情に任せた親愛表現。
初対面の赤の他人に、それも世間の荒波に揉みくちゃにされ根性のひん曲がった老婆に、こうも素朴な善意を向けてくるとは珍しい人種だ。
名前も知らない眼前の少女は馬鹿と紙一重の馬鹿か相当な変わり者に違いなく、店でも浮いてるはずだ。
面食らう老婆へふふっと悪戯っぽく笑いかけ、少女は人さし指を立てる。
「やっぱりここにきて正解だった、毒舌だけどハズレなし、怖いほど当たるって仲間内で評判だもの」
「アンタ……頭がどうかしてるのかい？」
「幸せすぎておかしくなってるって意味ならそうかも！」
少女は有頂天だった。
終始ご機嫌に、年相応にはしゃいでいた。
老婆は大層困惑する。
常識人や理屈屋には眉唾扱いされるが、彼女の未来視は本物だった。
ジプシーの血を引く老婆には客の運命が、どうかすると死期までがある程度見通せた。
この能力を不吉と忌み嫌われ石もて追われるせいで、どの街にも長居できなかった。この街もいずれ出ねばなるまい、

既に気味悪いと噂が立ち始めている。最近では客足も遠のき始めた。
幼い頃からそうだった。
親兄弟でさえ老婆の能力を気味悪がった。
一家の乗った幌馬車が強盗に襲撃されて自分以外皆殺されると口走れば激しい折檻を加えられた。その時の古傷はまだ残っている。
実際その通りになった。
馬車が横倒しになり、血の海が広がる殺戮の現場で、まだ幼い子どもだった老婆ただ一人が生き残った。
いわんや他人に疎んじられるのは仕方ない。老婆はけっして占いの結果を偽らず、客を欺かない。故意に占いを捻じ曲げたら天命に見放される。
若い頃は厄介な力を生まれ持ったと嘆いたが、一方ではこの異能頼みに生計を立ててきた。他に頼れるものはない。
たとえ身近な人間の死や悲劇を見たとして、占い師の矜持にかけて、真実のみを口にする。
故に老婆は盲いた目で視た予言がどんな災難に呪われていても率直に述べて、贔屓筋の有力者を怒らせてきた。共同体の和を乱す異分子は排斥される宿命だ。
自分の運命を察した老婆は、差別される側の弱者ならではのしたたかさを発揮し、私刑の憂き目に遭う前にまんまと逃げおおせてきた。
町で孤立し腫れ物扱いされている老婆に対し、少女は至って無邪気にふるまう。
老婆に干渉する事で立場が悪くなるとか自分まで噂の的になるとか、きっと考えもしてない楽天的な言動。
長年の迫害に荒んで心を固く閉ざした老婆にも、少女の行動はまるきり読めない。
もともと足りない子なのだろうか。
猜疑と懐疑が綯い交ぜとなった陰険な金壺眼で、じとりと少女をにらむ。
「悪魔を産む、と聞かされて怖くないのかね」
「そんなことで引くもんですか」
すっかりあきれ顔の老婆をよそに、まだ見ぬ子をそうするように両手を交差させ自分を抱きしめる。
「悪魔だろうが天使だろうが私のかわいい子どもだもの。はやく会いたい、いっぱいキスしてあげる。キュートな角にもチャーミングなしっぽにもキスをして、うーんとたくさん愛してるって言ってあげるの」
ねえおばあさん。
口元に薄く笑みを刷いたまま、妙に大人びた目で少女は呟く。

捨てられ、犯され、弄ばれ。
凄惨な生い立ちを想像させるにあまりある、達観と諦観が相半ばする瞳。
絶望を知らないのではなく、知りすぎたがゆえに淡く澄みきった目の色。
無知ではなく、無垢ではなく、いわんや白痴でもない。
無残な現実を知るが故に、無体な事実を知りすぎたが故に、彼女の目は透き通っている。

「この世界はちっとも優しくない、残酷でひどいところ。おっかない人もたくさんいる。ひとを出し抜き、だまし、裏切り。そうやって食い物にする悪党がたくさんいる。痛いことや怖いこと、汚いことがむこうからたくさん襲ってくる。でもね、私が産む子が悪魔なら……悪魔のようにしぶとくずぶとくしたたかに頭が回る子たちなら、どんな酷い世界でだって生きていける」

この世界が地獄なら悪魔になるのが正道。
外道であればあるほど生き残る「目」が上がる。
悪徳はびこるこの世界を良心で均せないなら、これからこの地獄に生まれ落ちる子には、あらかじめ悪魔であってほしい。
悪魔のように強く狡くしたたかに、どんな犠牲を払っても生き延びる術を獲得してほしい。
その犠牲のうちに自分が含まれるとしたら受けて立とう。
純粋であるが無垢ではない。
前向きであるが世間知らずではない。

「清く正しいだけの聖人君子じゃ生きていけない。無力な天使は狩り立てられる。お空の上の神様は面倒くさがりだから、きっとなんにもしてくれない」

だって何度も祈ったもの。
ママにハンガーでぶたれた時、食事をぬかれてひもじい時、たすけてと泣いて縋ったもの。
どん底でいくら祈っても、ずぅっとほったらかしだったもの。
みんながみんなほったらかされて寂しく死んでくなら、神様なんていないも一緒。
この世界がろくでもない掃き溜めとよく知る少女は、これ

から生まれてくる我が子が他人に殺されず奪われず、自らを殺してしまうことなく立ち回り生き延びる才覚と悪運に恵まれてることを喜ぶ。

「最悪の逆境を切り抜く才能。最悪の窮状を切り開く機転。どん底から這い上がる不撓不屈の精神。ナイフも鉛弾も爆弾もきかない、どれだけ傷付いても悪意を跳ね返し立ち上がるタフな魂。それらを兼ね備えた子なら、きっと―」

一呼吸おいて、微笑む。

「私の夢を、叶えてくれる」

老婆は絶句する。
少女は母の顔をしていた。
どこまでもずぶとく、底抜けにたくましく。
銃を持たずナイフも扱わぬ少女が、どうしてこうも強くなれるのか。
地獄で子をなす覚悟をしたからか。
その子を守り育てる存在意義を得たからか。
絶望を超克する希望。瞳に装填された強靭な意志力。傷を瑕としない美しい微笑み。

少女を脱皮して、一人の母親という生き物に生まれ変わった瞬間。

「だから嬉しいの。子供に先立たれるのはいや、私の産む子には強くなってほしい。銃で撃たれてもナイフで刺されてもへっちゃらで、どんな痛みも高らかに笑い飛ばす不死身の子なら、きっと長生きしてくれる。ホラ、あの草」
「草？」
「アレよアレ」
突拍子もない発言に老婆が目をさらにまんまるくし、脳天から素っ頓狂な声をだす。
少女は今しも風に吹かれて道端を転がっていく、丸く縺れた枯草を指さす。
「そんな強い子なら、かさこそどこまでも転がってくあの草みたいに、この世界全部が砂に帰っても太く逞しく生きてけるはずよ」
「アレは根無し草じゃないか。風に吹かれて西へ東へ、しまいにどこへ行き着くかもわからない風来坊さ」
「それでいいの」
薄汚れた頬に満ち足りた微笑み。
平らな下腹部を優しく抱え、風とじゃれあう枯草を見守る目は柔和に凪いだ光を帯びる。

全身から滲みだす豊饒な幸福感が、痩せっぽちの少女を輝かんばかりに美しく見せていた。
あるいは孕む前から兆す母性の発露か。
天涯孤独の少女にとって、家族ができるという予言は福音以外のなにものでもない。彼女はすでに母となる心構えができている。自分の産む子がたとえ悪魔であっても……あるいは健常な人のカタチをしてなくとも、心から愛しぬき育て上げるだろう。
少女の孤独は根深い。故に少女は狂おしく愛し愛される存在を欲した。老婆が何を言っても彼女はきっと産む。限りなく狂気に近い家族願望。
その子が将来悪魔のような人殺しになろうが、大陸中に手配書をばらまかれる極悪人になろうが、ずっとひとりぼっちだった自分に家族ができるのが嬉しくてたまらない。
「覚悟はできてるかい？　アンタは悪魔をこの世に送りだすことになるんだよ」
「それを言うならお婆さん、私のかわいい子を地獄に送りだす覚悟を問うてほしいわ」
低く脅すように念を押す老婆の目をしっかり見据え、こっくりと頷く。
「世界中のひとが悪魔と罵っても。たとえ此処が地獄であっても。私はその子に会いたいから、私のわがままで産むわ。そのことで子どもに恨まれたら喜んで地獄におちてあげる。もういいよ母さんって音を上げる位キスとハグをしてからね」
ざらつく砂塵吹きつける過酷な砂漠を西へ東へ転がる枯れ草から、死んだように無気力に道端に蹲る傷だらけの浮浪児たちへ目を移し、はっきりと断言する。
「私は絶対に子どもを捨てない。そんなお母さんにはならない」

私が子どもを手放すときは、その子が自由を求めて旅立つとき。
その子が夢を見つけたとき。

「自由に。奔放に。風の向くまま気の向くまま、私の手をはなれて転がり続けてどこまでも遠く。なにかステキなものがある、まだだれも見たことない世界のはてをめざして……」

地平線をめざして。
夕日へ向かって。
何物にも縛られず、何ぴとにも囚われず、まるで永遠のように。
火をつけたらよく燃える、転がりだしたら止まらない、あ

なたの名前は――……

夕焼けの大地に影絵を引き、即興の詩を紡ぐ少女の髪を乾いた風が弄ぶ。

枯草を追う赤茶の瞳は熱っぽく潤み、終ぞ見果てぬ世界のはてが映りこんでいるようだった。

夢見がちな少女と胆が据わった母とが同居するまなざしで枯草の行方を見守る少女に、根負けした老婆は吐息に乗じた苦笑いを浮かべる。

「一応言っとくと悪魔ってのは比喩だからね。角としっぽは生えてないからキスは諦めな。悪魔のように大それたことをやらかす大悪党になるって意味さ」

「まあステキ！　列車強盗かしら、無銭飲食かしら、どんな大変なことをしでかしてびっくりさせてくれるか胸がふくらむ！　タブロイドの一面に載るかしら？　カワイイ角としっぽが付いてないのはちょっと残念だけれど……大陸中に悪名を轟かせるアウトローなアウトサイダー……男の子はちょっとくらいやんちゃじゃなきゃ！　いえ、まだ男の子って決まってないけれど……息子だったらうんとハンサムがいいわ、子種をくれる人は顔で選ぼうかしら」

「あんたの子どもはとんでもなく不幸かとんでもなく幸せか、どっちかだね」

ついでこうも付け加えた。「子どもたちは立派なマザコンになるよ」と。

結論だけ言えば、老婆の予言は見事に当たる。

インディアンサマーとは北米において晩秋から初冬にかけての穏やかで暖かい日和をさす。落ち着いた人生の晩年にたとえていうこともある。

暦上の季節は既に意味をなさない。

この世界が四季を失って久しい。

第三次世界大戦で濫発された核兵器や生物兵器の影響で地球の環境と気候は激変し、北米大陸は一年通して乾燥した気候となった。見渡す限りほぼ乾いた砂で、前時代文明の遺物のコンクリート道路に沿って、オアシスのように都市が点在している。

都市と言っても最低限のライフラインとインフラが整えられた小規模なもので、集落や町の単位で形容したほうがしっくりくる。

人口は多くて五千、少ない所は三十に満たない。

世界は一度滅びて息を吹き返し、長いエンドロールの途上にある。あるいはもう既に滅んでいるのかもしれない。

ガソリンスタンドの跡地に薄汚れたトレーラーハウスが一台駐車している。

サボテンが生える辺鄙な砂漠のど真ん中、コンクリートで固めた敷地。ここが当面の一家のねぐらだ。トレーラーハウスだけだと何かと手狭なので、拠点を確保できたのは僥倖だ。幌馬車で移動するジプシーの集団や、ジープを駆ってやりたい放題暴れまわる強盗団の先客もいない。

廃墟を臨む丘の斜面には街に電力を供給する風車が無数に回っている。

ガソリンスタンドに併設する店舗の陳列棚を検めれば、まれに缶詰を入手できる幸運に恵まれることもある。大抵は賞味期限切れだが、味は二の次で食えないこともない。

尤もここは先客が荒らしまわったあとで、めぼしい食糧や消耗品はあらかた漁られていた。からっぽの陳列棚には埃しかたまってない。床と壁と天井にはどす黒く乾いた血痕がこびりついている。強盗同士がかちあって殺し合いを繰り広げたのだろうか、早い者勝ちと弱肉強食の理念は健在だ。

スナッフフィルムの撮影場と見まがう凄惨さだが、荒みきった今のご時世、缶詰一個を巡って銃を撃ち合うこともけっして珍しくはない。腐った死体の歓迎を受けないだけラッキーだ。

店舗の窓ガラスはめちゃくちゃに叩き割られ、長年風雨にさらされて黒ずんでいる。トルネードやタイフーンによる自然災害か人的被害かは不明だ。

外壁と車寄せには先住者のマーキングか、髑髏や悪魔をモチーフにした冒涜的なスプレーアートが夥しく殴り描きされている。

勃起したペニスや女性器の断面図、電波にのせたらピー音で消されること必至の卑猥なスラング……視覚への暴力ともとれる、芸術家かぶれのヒッピーの蛮行。

放送禁止用語を列挙したようなスラングと猥褻なスプレーアートに埋め尽くされたガソリンスタンドの裏手には平らに均された土地があり、ドラム缶や廃車、ガソリンを入れる一斗缶などのガラクタが雑多に放置されている。

そこに少年がいた。

年齢は十三、四か。

柔和で温厚そうな赤錆色の瞳、人のよさが滲みだす優しげな風貌、なんだかいつも困ってるような下がり気味の細い眉。言葉を選ばず表現すれば、情けないとか女々しいとかそんな形容がよく似合う。

将来は色男じゃなく優男になるだろう、頼りがいにはいまいち欠ける草食系の風貌だ。

まだ骨格が出来上がってない華奢な体は成長期の途中で、

そろそろ喉仏が目立ち始めてきた頃合いか。赤みがかった金髪……俗にいうピンクゴールドの髪は、細く柔らかい髪質の猫っ毛で手ざわりがよさそうだ。
少年は教会の救貧箱からかっぱらってきたような、擦り切れたモッズコートを羽織っている。
下は薄手のシャツとズボンだけ。
体格にはやや大きすぎるモッズコートに着られた姿は滑稽だが、衣食住に事欠く現状で贅沢は言ってられない。
いや、簡単な自炊設備の整ったトレーラーハウスがあるから住は間に合ってるが……トレーラーハウスの中はなにかと手狭で不便なのだ、せめて一人で足を伸ばして寝れるベッドがほしい。
少年は今日も寝不足だ。弟は寝相が悪い。就寝中も蹴飛ばしてくる。仕方ないので蹴落とされない日はラッキーと判じる寝相占いで自分を慰めている。少年が考案したオリジナルの占いだが、的中率はとても低い。残念ながら。
それも仕方ない。
少年は生まれてこのかた13年と8か月、受難に見舞われ不運に愛され続けているのだ。
気弱な顔立ちに幸薄そうな気配が漂うのはそれ故か、悪人に付け込まれる隙だらけだ。
「今日は調子がいい。イケそうな気がする」

声変わりしかけの低く掠れた声で呟き、軽く咳をする。
錆びたドラム缶の上にそこらで拾った空き瓶を一列に立てて並べ、二十メートルほど距離をとる。
ドラム缶のちょうど正面に位置取り、ポケットから出した手製のスリングショットの最後の微調整を行う。
仰向いて風の強さ、吹いてくる方向を確かめる。
深呼吸ひとつ、ほどよい緊張感で心身を満たしていく。
ゴム紐を伸ばして弾くウォーミングアップ、小気味よい手ごたえに高揚する。
慎重にスリングショットを構え、まずは右端の瓶に狙いを定める。
てのひらが緊張でじめつく。
ぎらつく陽射しが脳天に照りつける。
こめかみを一筋汗が伝う。
息を止めて集中力が臨界に達するのを待ち、ぎりぎりまで引っ張ったゴム紐から銀に光る玉を打ち出す。
スリングショットから放たれたパチンコ玉は風切る唸りを上げてまっしぐらに宙を疾駆し、右端の瓶のど真ん中を穿つ。
空き瓶が中央から真っ二つに粉砕され、ガラスの破片が飛び散る。
続いて隣、その隣と快進撃が続く。

少年が手際よく放ったパチンコ玉は狙い違わず順番通りに空き瓶を撃ち抜き粉砕する、甲高い音と共に瓶が爆ぜてきらめく破片が舞う。
一本、二本、三本、四本、五本……
十本目が爆ぜる。
「やった、新記録だ！」
有頂天でガッツポーズ、おもわず快哉を上げる。
滾る歓喜に紅潮した頬、少年らしい得意絶頂の色が満面に咲き綻び、臆病で大人しい印象が塗り替えられる。
絶好調で全てを撃ち落とし、新記録を打ち立てはしゃぐ少年の背中に何かがあたる。
「ぶぁーか、なーにが面白いんだっての」
小生意気にビブラートをきかせた罵声に振り向く。

少年の背中に丸めたガムを投げ付けたのは後方のドラム缶に陣取って、退屈そうに足を揺らす子どもだ。
体格は一回り小さいが態度は尊大、口調は粗暴。
左右の耳朶に何本も安全ピンを刺し、それだけでは飽き足らず、ビビッドカラーのタンクトップから剥き出しの両腕に黒墨のタトゥーを入れている。胸元にはちゃちな鎖に通したドッグタグが光る。
同じ金髪だが、少年とは少し色合いが違う。こちらは髪質が固いのか、ごわついたモップさながらバサバサと跳ねまわっている。
意志の強さを反映しかっきりと弧を描く眉、赤錆の虹彩をはめ込んだアーモンド型の目、薄く整った唇はいつも不満げに口角がさがっている。
ボーイッシュな少女に見まがう小作りで愛らしい風貌だが、のびやかな四肢のすみずみまで闘争本能と反抗精神が漲っている。まだほんの子供の段階でも人の目を惹きつけてやまないとびきりの美形だ。将来は女泣かせの色男になるだろう。
ドラム缶に行儀悪く片膝立てて座ってるだけでペドフィルを色に狂わせる魅力を垣間見せる。同時にその居住まいから傲慢なまでのプライドの高さが窺い知れる。
他人に媚び諂うのを是としない、孤高な猫科の気位だ。
それも愛玩用の子猫ではない、隙あらばエモノの喉笛に食らいつく獰猛な山猫だ。
雰囲気はまるで違うが、髪と目、それに面影がどこかしら似通う。
ふたりは血の繋がった実の兄弟だった。
「水をさすなよスワロー、せっかくいい調子だったのに」
一部始終見物されているとは思わなかったのだろう、溌剌と弾けた喜びの色は見る間に萎み、きまり悪げに拳を引っ

込める。
気分を害した兄の苦言に、スワローと呼ばれた少年は失笑を浴びせる。
唇の片端を皮肉っぽく吊り上げるゲスな笑い方。アシンメトリーの微笑。
整いすぎた顔立ちだけにふてぶてしさも一級品だ。案の定ピジョンの上機嫌はくじかれる。
スワローが立てた片膝に顎をのっけて小首を傾げる。その手の嗜好の人間が見たら小悪魔的な媚態に映るだろうが、本人の意図は全く別だ。スワローの横にはピジョンが組み立てた小型ラジオがちょこんと置かれ、垂直に伸ばされたアンテナの先端が陽光を弾く。
「そりゃ失礼。で、軟弱ビビりの我が兄貴サマは今日も今日とて空き瓶に玉あてごっこか。動かねえものを撃ってなにが楽しいんだ？　犬猫ならまだわかるが」
「生きてる動物を撃ったら可哀想じゃないか」
「腰抜けめ。だったら自慢の射撃の腕を生かして魚でも鳥でも狩ってこいよ、てのひらに豆だここさえても一文にもなりゃしねえ」
「魚って、この砂漠のどこに池や川があるんだよ。鳥は飛んでないし……死肉漁りのハゲワシならいるかもしれないけど、そんなの食べたらお腹壊すよ。俺はいやだ、死体を食べた鳥なんて食べたくない。間接的カニバルじゃないか」
「好き嫌い言ってたら溺死体を啄んだ魚も土に返った死体に生えたきのこも食べらんねえぞ、自分のささむけ齧って飢え死にだ」
「うぷ……想像したくない」
「コヨーテでもいいぜ」
「スリングショットでコヨーテに立ち向かえって？　自殺行為だ、無難に死ぬ。それにこのへんのコヨーテは骨と皮ばかりでうまくない。知ってる？　肉食動物の肉は臭いんだ」
「殺生しねえ言い訳だきゃ一人前だ」
スワローは苛立たしげに舌打ちをくれる。
せめてもう少し愛想よくすれば、たまに立ち寄る町の女の子だって放っておかないだろうに……ギスギスした殺気をまきちらしてたんじゃ怖がられる。
地味な容姿と存在感の自分にははたから目もくれないティーンエイジャーの女の子たちが、スワローが通りがかった途端に黄色い声で姦しく囀りだす経験は枚挙に暇がない。正直ほんの少しジェラシーを感じているが、弟には絶対言わない。ピジョンにだって最低限守りたい意地とプライドはあるのだ。
「名前通りの平和主義者か、ピジョンおにーたまは。獣も

狩れねえ、人も殺れねえ、何のためにそのオモチャで毎日シコシコ鍛えてやがんだ？　何時間も、どうかすると半日も……自分をいじめるのが楽しいマゾなのか」
ドラム缶を蹴立てる轟音に、少年―ピジョンはびくりと身を竦める。その怯えぶりがスワローを苛立たせる悪循環、一方的にやりこめるだけでは兄弟喧嘩になりもしない。
ピジョンはおずおずと口を開き、何故だか腹を立てている弟に抗弁を試みる。自分の得意なこと、唯一の特技にかけては妥協できないと、気が優しい彼には珍しくむきになって一歩を詰める。
「一日でもサボると勘が鈍る。こういうのは毎日地道にコツコツと積み上げてくのが大事なんだ」
ピジョンは努力が苦にならない性質だ。少しずつ腕前が上達していく体感と現実に心から喜びを感じる。なにごとも辛抱強く待つのは慣れている、スワローが生まれてからというもの忍耐力は鍛え上げられた。
スリングショットをためつすがめつ日に翳しピジョンはうっとりと言う。
「コイツは俺の宝物だ。いちから手をかけて作り上げた。旅先で落ちてる小枝を拾って、ナイフでちょっとずつ削り上げて、何度も試し撃ちをしてはゴムを取り換えて微調整を重ねて」
「知ってるぜ、今のゴムは母さんの下着から拝借したヤツだ」
「あ、アレが一番伸縮性がよくて威力が出たから……母さんには黙ってろよ」
「お気に入りのパンティーがへたれて嘆いてたぜ」
「悪いことをしたと思ってる。拾いものとありあわせで間に合わせるしかなくて……」
「人を殺せない武器に意味あんの？」
スリングショットをやさしくなでるピジョン。初めてできた恋人の手を握るような仕草。
手のひらにできた豆だこは自主訓練に膨大な時間を注ぎ込んだ証拠。
「いいかいスワロー、一度しか言わないからよく聞けよ」
もったいぶって、兄ぶって宣言する。
「人を殺したら凶器だ。武器は自分の身を守るために使うのさ」
弟に真摯に説き、何もセットしてないゴム紐を伸縮させる。
「俺は人殺しになりたいわけじゃない。だれも傷付けず、だれにも傷付けられず、ただ平和に生きたいんだ」
お前と母さんとみんなで。
口に出さずに秘めた家族思いの少年らしい純粋な願い、あるいはささやかな理想。

「そのためにコイツの腕を磨いてる。まだまだ未熟だけど……毎日諦めず頑張れば、俺だってそれなりにモノになるかもしれない。将来的にはそう、コヨーテやカラスの群れくらいは追い払えるようになるんじゃないかな。メイビー」

「リアリィ？」

「リアリィ」

生き物を撃つのは気が進まないけど。

馬鹿にしきって語尾を上げる弟に頷き、はにかみがちに俯く。

曖昧に語尾を濁すのは自信のなさの表れか、おのれを卑下するのに慣れた卑屈さの裏返しか。

ピジョン―平和の象徴たる白鳩の名を付けられた少年は、その名の通り心優しく純情に育った。

けれども自分が胸に懐く願いが、今の世界ではどれほど得難く、分不相応なものか理解できる程度には現実を痛感している。

本音を漏らしたら最後この根性悪からどんなリアクションを引き出すか、自衛できる程度には経験則の知恵も回る。

だがしかし。

ピジョンもまた、等身大の自尊心を持った少年には違いなく。

つい口走ってしまう。

スワローを激怒させる一言を。

「お前が襲われてたら助けてやらないでもないよ」

カチンとくる恩着せがましい物言いに、さらに余計な一言を付け加える。

「気が向いたら、だけど。一応兄さんだし。二年も先に生まれたし。実際のとこ母さんに頼りにされてるのは俺の方だし」

一言じゃすまない。

「声変わりは俺の方が早かったし。背丈でもまだちょっと勝ってるし。お前はいつも俺のことグズだのノロマだのお荷物だの足手まといだのチキンだのヘタレだのばかにするけど、実際そこまでひどくはない。俺だってやればできるんだから。そうだよ、俺はやればできるやつなんだ。これまではちょっとツイてなかっただけさ。褒めて伸びるんなら貶されてへこむだろう、俺のこともうちょっと兄さんとして敬ってもバチあたらないんじゃないかな。ベッドで寝るときも三分の二占領してさ……せめて半分こしようよ、たったふたりきりの兄弟だろう？　寝床は平等に分け合おう。毛布をひとりじめするのもやめて。いつも蹴落とされて床で寝る羽目になるんだ、おかげさまで背中が痛い。寝不足と筋肉痛の二重苦だ」

パチン、パチンとゴムを弾きながら、日頃さんざん自分を虐げ省みぬ弟への恨みつらみを述べる。弟の眼をまっすぐ見る勇気がないため、かたくなに俯いているのがどこまでも小心な彼らしい。

スワローは私怨に染まった兄の愚痴をジト目で聞いていたが、唐突にギザ歯を剥いて、悪魔のように邪悪きわまりない笑顔を浮かべる。

「お脳がお花畑だな」

所在なげにいじくりまわす兄の手から「貸せよ」とスリングショットをひったくり、適当な小石をつがえる。

ゴムごと小石を引っ張り、片目を眇めて遠く近く、大雑把な勘頼みに距離を測る。

「ちゃちなガキのおもちゃじゃねーか。ハンドメイドにしちゃよくできてるけど、いいとこ努力賞だな」

「返せよばか、乱暴にしたら壊れる！」

ばたつくピジョンの手をひょいひょいとスリングショットがすり抜けていく。名は体を表すという諺通り、すばしっこさではスワローが数段上だ。

スワローは深呼吸し、至って無造作に踏み構える。

スリングショットを持った片腕をまっすぐ伸ばし、反対の手でゴムを矯める。

空気がピンと張り詰める。

たった一動作に目を奪う流線形の美しさがある。

シャープに研ぎ澄まされた一挙手一投足は、掃き溜めに舞い降りた燕を見るようだ。

片目を瞑って狙いをつけ、ヒュッと鋭い呼気を吐く。

放たれた小石は一直線に飛んでいき、割れ残った瓶の下部を木っ端微塵に打ち砕く。ピジョンの顔に驚愕の波紋が広がる。

スワローはシラケた表情のまま、無関心に呟く。

凡人の努力を一切理解せず足蹴にする天才の傲慢さで。

「毎日地道にコツコツと、だっけ？」

あっさりとスリングショットを投げ捨てる。

「猿のオナニー、馬鹿の一つ覚え。テメェがやってるのはそういうこった。無駄な努力ご苦労さま」

弟が放り出した得物を両手でキャッチ、耳朶まで赤く染めて恥辱に耐えるピジョン。泣き出す前兆か唇が小刻みに震えている。

スワローはド素人の初心者だ。

おそらくこの時初めてスリングショットを手にした。

その腕前は最初の一回で兄を凌ぐ冴えを見せた。天性の勘と素晴らしいセンスに恵まれている。

ただそばで見ていただけ、それだけで全てを体得してしまった。
天才肌の弟と努力家の兄、異端の弟と凡庸な兄。
物心ついた時からすっかり対照的な構図ができあがっていた。要領が悪くなにかと躓きがちな兄をよそに、スワローは一度コツさえ掴んでしまえばなんでも易々とこなす。年はふたつしか違わないのに内実では百馬身引き離されている。胆力でも腕力でも、もはやどうあがいたところで絶対にかなわない。優秀な弟と比べられ貶められるうちにいつしかピジョンは諦め慣れし自分を卑下する悪い癖がしみついてしまった。
俺なんかあいつの足元にも及ばない。
俺なんかどうがんばったってスワローに追いつけない。追い越すなんて夢のまた夢だ。
自嘲と自虐で自縛して自爆に至る、それは呪いだ。スワローはそんな劣等感のかたまりの兄を露骨に馬鹿にし日常的に暴力をふるう。ピジョンはやり返さずじっと我慢する。勝つ自信がないから？　怒らせるのが怖いから？　おそらくその両方だ。兄の威厳なんてものはこれっぽっちもない。すこぶるつきの腕前をいやというほど見せつけられ、ちっぽけなプライドをずたずたに引き裂かれる。
唇をきつく噛んでうなだれる兄にスワローは留飲をさげる。
「う……」
モッズコートの袖口で目尻を拭い顔を隠す。ひどくガキっぽい仕草。
大人びた振る舞いを心がけていても精神年齢は年相応に未熟だ、弟に恥をかかされ澄まして受け流せるほどピジョンも人間ができてはいない。いや、大人になりきれてない。スワローは知ってる、兄がしばしば洟を噛むせいでモッズコートの袖口はかぴかぴに乾いてる。汚い。コイツは潔癖症のきらいがあるくせに俺に涙を見せたくないから泣くたんびにそうする、そして後になってアルミの盥に水を張り石鹸を泡立てしこしこ洗うのだ。
兄の事なら何でも知ってる。
一番いやがることも一番痛がることもなんでも。
「弟の前でかっこつけようとしたのに残念だったな、オニイチャン」
ピジョンにずいと迫り、その顎を片手で掴んで固定する。
「！　痛ッ……見る、な」
「言いたいことがあんならはっきり言えよ。びびってんのか」
「……離れろ。近い」

「あ〜ん？　なんだって聞こえねえな、ちゃんと目ェ見て言えよ」
「だから近すぎだって……息がかかってくすぐったい、くっつくな」
「具体的にどこが？」
「どこって……首筋とか耳たぶとか、その、皮膚が薄いとこ……」
「敏感だな」
途切れ途切れのよわよわしい抗議。腕を払いのけ暴き立てた泣き顔、ふやけきったべそっかき。いじめてくださいと看板を下げているような顔。
ああ、この顔、この声だ。ピジョンの嫌がる素振りはいつだってスワロウを辛抱たまらなくさせる。
ピジョンの足を蹴って、股間を掠めて自分の足を割り込ませる。
「なにす、ぅわ」
「知ってるか？　体の先端にゃ毛細血管や神経が集まってるから一際敏感になるんだそうだ。だからこうやって」
もう一方の手でシャツ越しにピジョンの薄い胸板をまさぐる。
「めーっけ」
「ぁ、や」
親指の腹で乳首を揉み潰す。性的な刺激にとびきり弱い兄が腰砕けにへたれこみそうになるのを許さず、顎を乱暴に掴んだまま自由な方の手で乳首をねちっこくいじめぬく。
一緒に寝起きする血の繋がった兄弟だ。
ピジョンの弱いところは余さず知り尽くしている。
シャツに隠され形もはっきりしなかった乳首が次第に固くしこり、尖り始める。
「へん、なとこ、いじるな……悪ふざけもいい加減にしろよ、怒るぞ」
「おもしれえ、野郎も乳首で感じんのか。それともお前がとびっきりのビッチなのか、どっちだ」
喉の奥で嘲り笑えば、ピジョンが涙ぐみ、ぐしゃぐしゃに表情を崩す。
憤怒、恥辱、性感、全部が煮溶かされ浅ましく蕩けきった顔、じんわり熱を帯びて震える瞼……
これじゃあ拒んでるのかねだってるのかわかりゃしない。
スワローの股間が反応する。
シャツ越しの愛撫はまどろっこしく、スワローの指遣いには一切の容赦がない。
指の腹で突起を圧し潰し、捏ね回し、揉み搾る。
ふにふにくにくにした感触が面白い。
「あっ……ふぅっく……」

腫れきった乳首を指に挟んで擦り立て、切なげに息を荒げる兄を意地悪く追い上げていく。
テクニックは未熟、稚拙で性急な技巧には欲情が先行する。くすぐったさがむずがゆさへ変わり、熾火を掻き起こして甘い疼きがこみ上げてくる。
学校に通った経験がなく、漠然とした性知識しか持たない十代前半の少年にとって、己の体を翻弄する生理現象はタブーを犯す禁忌と凄まじい背徳感をもたらし、それがまた性感を燻らせる。
自分の体が思い通りにならない、極端な反応を制御できない。
「こりこりしてきた。自分でもわかんだろ、芯が立ってきたの」
「っあく、あぅ」
体に意志を裏切られる絶望感にうちのめされ、びくびくと断続的に痙攣する。
「ふ……、スワロー、やだ、それやめて……なんかへん、だ、へんになる」
根っこから先端へ揉み絞り、爪をじくりとめりこませる。
「相変わらず乳首いじくられんの好きだな。尖りまくって気分だしてきたじゃねーか」
「ちが……」
「綺麗なピンク色。女と一緒だ」
「み、見たことあるのか？　母さん以外の女の人の……」
「乳首か」
「そうそれ」
「乳首ぐらいで口に出すの恥ずかしがってんじゃねーよ」
「連呼するなよ」
「ド変態。ド淫乱。乳首責めで感じまくって今にもイッちまいそうなドM野郎」
「あぅ……もうやめ、ろ」
熱い吐息に乗じて囁かれた卑語にびくりとし、嗚咽に掠れた声で懇願する。
思った通り、いたぶられるほどピジョンは感じやすくなる。抵抗は建前だけでその実まんざらでもない。天性のドMの素質があるのだきっと、救いようないド変態が。実の兄への嘲りと、それを上回る征服欲が腹の底で煮えくり返る。ピジョンの耳朶に血が集まっていく。甘噛みしてやれば面白いように反応を示す。
「見ろよテメエのエロ乳首、シャツごしに完全に勃ちあがってら。息吹きかけると震える。ぷっくり腫れあがって……クリトリスだなまるで」
「っ……」
「エロエロのクリ乳首。ちょっといじくられただけでこん

なになってら。雌イキはできるのに母乳がでねえのが惜しいな、がんばればできんじゃね。飲んでやるから出してみろって」
「でるわけない……スワロー頼むおねがいだから、これ以上恥ずかしくさせないで……下品なポルノ朗読されてるみたいだ、耳が腐ってもげる」
「兄貴がマットレスの下に隠してるアレか？」
「な、なんで知ってるんだよ！」
「トイレにこもってこそこそ読んでんのバレてねーとでも？」
「〜〜〜〜っ!!」
「テメエが入ったあとはイカくせーからすぐわかる」
「……ちょっと、今のはかなり、本気で傷付いた」
「あーゆー貧乏くさい下着の地味女が好きなのか？　白や水色の……交差させた腕で胸を隠して上目遣いでチラ見してくるような」
「せ、清楚って言えよ。俺の下着の趣味、じゃない、女の子の趣味はほっとけ」
「アレでヌケるなんて妄想逞しすぎるんじゃねえか、水着や下着の女が張っ倒したくなる意味深な目線くれてるだけじゃねーか」
「想像の余地があるほうが好きなんだよ。行間を読む心を大切にしたい」
「チラリズムや寸止めに興奮するタチ？」
「絶対領域は全部見せちゃったら意味がない」
「あんなの三歳児でも勃たねーよ」
「三歳児が勃ったら怖いよ」
「大股開きのオールヌードやセックスポルノじゃなし、母さんの客がおいてったドギツいＳＭ雑誌はどこやったよ？」
「痛いのはいやだって何度言わせるんだ、とくに女の子が縛られて鞭打たれて蝋落とされてるのはやなんだよ……可哀想で直視できない。三角木馬って拷問具じゃない？　股が縮む。亀甲縛りは芸術だけど日本人は変態だ」
「ばっちり見てんじゃねえか」
「こ、怖いもの見たさで最初の方だけぱらぱらめくっただけで深入りはしてない断じて！　最初の数ページだけでたくさんだ！」
「濃厚なプレイなんざ母さんと客の乳繰りでさんざん見飽きたろ。俺もお前もコンドームをガムと間違えてくちゃくちゃ噛んで大人の玩具をオモチャにして育ったんだ、忘れたとは言わせねーぞ」
「お前がアナルパールを蟻地獄に突っ込んでぐりぐりやってたの、忘れたくても忘れられない」
「兄貴だって床にローションまいて滑って遊んだろ、カーリングごっこだーって」

「お前がこぼして俺が後始末したんだよ」
「あーそうだっけそうだった、運動音痴が勝手に滑って転んだんだっけ」
「わざとらしい……」
兄弟の母はトレーラーハウスで客をとる流しの娼婦だ。
仕事中は幼い息子ふたりを外に出して遊ばせていたが、故意か事故か、覗き見した経験は数えきれない。特にスワローはその手の事に興味津々で、耳を塞いでしゃがみこむ兄の首ねっこを引っ張っては、母の情事を目を輝かせ観察していた。そんな前科が嵩んだせいか、齢11歳にして一端の知識を備えたセックス通が仕上がった。
スワローに至ってはとっくに初体験を済ませている。テクニックは未熟でも彼自身は早熟だ。尤も生活環境を鑑みれば然程おかしくない、生計を立てる手段として売春が横行する世相では十代の未婚の母や父があふれている。
スワローに言わせれば13にもなって初体験もまだ、後生大事に童貞を守ってるピジョンのウブさこそカマトトこじらせた絶滅危惧種なのだ。
性癖を暴露され、顔から火が出そうに真っ赤になった兄をからかう。
「頭も顔も濡れまくってぐちゃぐちゃだな。股間はどうだ、蒸れ蒸れでイきそう？」
「イくわけないだろ……異常者扱いするな、俺はお前と違ってノーマルなんだ、ちゃんと女の人が好きだし、その、ちゃんとするなら好きになった人がいいし……」
「どうせポーズだけだろ、嫌がってンなら体が反応するわけねえ」
「うぐ……」
「乳首と股間おっ勃てて早く早くって堪え性なくおねだりするわけがねえ」
「だってそれは、お前のさわり方がしつっこくていやらしいから……」
「気持ちいいからの間違いだろ。リピートアフタミー」
上下の唇ではみ、軽く歯を立て、吐息を吹きかけるくりかえし。
「いやだ……はなれろ気持ち悪い」
「おかしいのはお前の体？　それとも俺達がやってること？」
「複数形にするな、お前が一方的にやってることじゃないか」
「ハッ、被害者ぶんなよ。だったらなんでシャツ越しでもくっきりわかるほど乳首がしこってきやがんだ？　男のくせに乳首勃たせて恥ずかしくねーのかよ、えェ？　ひどくされるのが好きならそう言えよ、もっといじめてやっから」
膝頭で小刻みに股間を揺すり立てれば、律動から送り込ま

れる甘い痛みにピジョンが呻く。
「股ぐら押し潰されてよがってんのか？　痛いのがイイってか？　腰が浮いてるぜ」
「あ……っく、い、やめ」
「立ったままイッちまうか？　ほら」
「押すな、そこ、や」
汗と涙でぐしょぬれになった前髪をしどけなく額にはりつかせ、シャツを半ばまで捲り上げ身もがく最高にエロティックな眺め。
「っああっ！」
出来心が騒ぎ、シャツの上から乳首に吸いつく。
「しょっぺえ」
ちゅっちゅっと吸い上げ、舌でつついてなめ転がす。シャツにピンクの先端が透ける眺めはたまらなく扇情的で、見下ろすピジョンの羞恥とスワローの劣情を加速させる。
「きょ、兄弟で……男同士で。こんなのへんだよ、母さんに見つかったらどうすんのさ」
「その母さんのまねごとだ。男同士なら好都合だ、ガキできねーしゴムいらねーし。勝手に濡れねーのが面倒だけど、テメエにも穴は付いてんだろ？　ツッコんじまえばおんなじだ」
実の弟に「穴」呼ばわりされ、ピジョンが愕然とする。もはや言葉もない。
「いやいや待てよ待て、その穴は出す所で入れる所じゃないから!?　入れるようにできてないから!!」
「だったらなんで母さんにペニバンでずこばこ突かれたデブが外まで聞こえるでっけえ声でよがってたんだよ？　野郎だってケツ掘られりゃ気持ちいいんだよ」
「俺はお前の穴じゃないしオナホでもダッチワイフでもない、女に困ってないなら他あたれよ、町の子をナンパしてくりゃいいじゃないか！　こないだ買い出しに行った時お前の方ずっと見てた子がいたろ、雑貨屋の店番してた……結構かわいかったじゃないか、赤毛のショートヘアで。こっそりキャンディおまけしてくれた」
「あーゆーねんねが好み？」
「嫌いじゃないけど……その、いい子だし。やさしくしてくれた」
「やさしくするイコール気があるって？　お前にゃ目もくれなかったろ」
「キャンディもらった」
「俺のおまけのおまけにな」
「……」
「何味？　俺はコーラ」
「……ペパーミント」

「とオレンジとストロベリーとグレープとレモン」
「五個も？」
「一個っきゃもらえなかったのかよ」
「……ホント言うと飴ってそんな好きじゃないんだ、虫歯になるし。口の中べとべとするし。飴玉を欲しがるほどガキじゃない」
「母さんならどのみちまだとうぶん帰ってこねえさ、安心しろ」
「安心する要素がどこにあるのさ！」
「耳タコで興ざめだ、しらけること言うな。わざと萎えさせようとしてんなら浅知恵回る策士だな」
「萎えるってなにが」
「……マジ？」
ピジョンが童貞なのは知っていたが、純情を通り越して無知だとは。

「おねがいスワロ……胸くすぐったい、しゃぶらないで……なん、か、おかし……くすぐったいだけじゃなくて、あっふぅ……」
「喘ぎながらしゃべると舌噛むぞ馬鹿。お前がそれでいいならいいけど」
「いいわけないだろ……ッ……」

シャツと擦れ合い生じるじれったい掻痒感が、弟にいじくりまわされ勃起した乳首を痛いほど過敏にする。
興奮に乾いた唇をなめ、スワローは綺麗に整った顔に残忍な笑みを刷く。
「むらむらする？」
「むずむずする……じゃなくて！　やめてって！」
辛抱強く教え諭す口調は兄の意地か。シャツの胸元を涎まみれにし、濡れ透けの乳首を勃たせた姿じゃまったく説得力がない。
スワローの背筋にぞくりと快感が走る。支配欲と優越感とが混線する恍惚感。
すれ違ったら三秒で忘れてしまいそうな地味な顔のくせに、泣き顔だけは異様に色っぽい。コイツは本気で嫌がるほど、本気で痛がるほど倒錯的な色香を垂れ流して加害者を挑発する損な性分なのだ。本人に全くその気がなくても関係ない。どころか、本人の嫌悪と反比例してみだらさを増していく。
恐怖、嫌悪、恥辱、憤怒、苦痛……それら負の感情が煮溶けて渦巻く表情は、スワローが出会ったどんな手練手管に長けた娼婦よりも征服欲を焚きつける。
「やっ……ふ、もうやっ……」
鼻にかかった甘ったるい声に股間がじんじんする。

「ぐずるなよ、すんすん鼻鳴らしてミルクを啜る子猫ちゃんみてえだ」
「お前さ……は、恥ずかしくないのそーゆーこと真顔で言って……」
「シューチシンが死んでっからな。お前も下手なプライドかなぐり捨てりゃもっと悦くなれるぜ」
弟の品性と正気を疑うのは今に始まったことじゃないけど、種違いだとこうも性格が違うのか。
お互い母親じゃなく顔も知らない父親の方に似てしまったのかもしれない、不幸なことに。
どん引きするピジョンをよそに、本人曰く「羞恥心が天国に旅立った」スワローの悪乗りは止まらない。どうでもいいが、スワローの羞恥心は地獄に落ちたのだとピジョンは思っている。兄弟間の見解の違いだが永遠に和解はしないだろう。
「！　あっ、」
痩せた下腹を掴み、未成熟な細腰を引き寄せる。
剥き出しの胸板を見て、スワローの眼光が険しくなる。
「やっぱりな。んなこったろーと思ったぜ」
モッズコートを皺くちゃに乱し、シャツを胸まではだけられたあられもない姿態。外気にさらされた裸身には赤や黄、または青黒く色素が定着した痛々しい痣が散らばっている。
大小の擦り傷や生傷も無数にある。
「だれにやられた？」
声を低めて聞く。兄は答えない。唇を噛んで押し黙る。
そのすべらかな頬に手のひらを移動させ、熱っぽく湿った吐息が絡む距離でもう一度囁く。
優しいとさえいえる微笑みと声音に、優しくされてると錯覚しそうになる。
こんな酷くて痛いことされてるのに行為中に気まぐれに貰える飴だけで小休止の優しさにほだされそうになり、こみ上げる涙を急いで追い返す。
「吐けよ。だれがやった」
「……たいしたことじゃない。へっちゃらさ」
頭皮に激痛が走る。スワロ―が乱暴に前髪を鷲掴んで揺さぶったのだ。
圧を増した眼光をピジョンの眼の奥に抉りこみ、うっそりと口を開く。
「んなこたあ聞いてねぇんだよ馬鹿が」
コイツは虚勢を張る場面を間違えてる、文字通りのやせ我慢だ。あるいは家族に心配かけまいとしてるのか。
心配？
だれが心配するんだ？

俺か？

奥歯をがりっと噛み締め、唸る。

「テメエ、俺様に心配してもらえる立場だと思いあがってんのか。ただ血が繋がってるだけ、二年先に生まれただけの分際で俺が心配してやる義理がどこにある？　なあピジョン、平和を愛する小鳩ちゃん、テメエはただ聞かれたことに答えりゃいいんだよ。鳩ぽっぽならオウム返しよかちょっとはマシなおしゃべりができんだろ。それとも何か、その形いいオツムに詰まってんのはおが屑か？　火ィ点けりゃよく燃えそうだな」

ぐいと手荒く頬を押し上げて急接近、眼光鋭く脅せば、ピジョンはぼそぼそと喋りだす。

「……町の子。俺が……うろついてるのが目障りだって」

「ふん」

大方予想通りの答え。これが初めてじゃない、今まで何度もくり返されてきたことだ。

街の住人はよそ者に冷たい。異端者は排斥される。親子三人、トレーラーハウスで流浪する一家は行く先々で心ない住人から迫害を受けてきた。

遠くから石を投げられたり陰口を叩かれる程度ならかわいいものだ。食糧を仕入れにいった雑貨屋で売り渋られた経験もある。そういう時はスワローの出番だ。ピジョンがべそをかきつつ手ぶらで帰ってくるたびスワローは店の親爺を力ずくで締め上げて、購入予定だった商品をしこたまぶんどってくる。今気付いたが最初からスワローが出張る方が効率的だ。

鈍くさい兄のことだ、買い出しの行きがけか帰り道に悪ガキどもに絡まれたのだろう。気の優しいピジョンは格好のいじめの標的で、犬が歩けば棒にあたる頻度で、なにかと不良連中に絡まれている。

ピジョンがうしろめたそうに目を逸らしつつしどろもどろ弁解する。

「悪い人ばかりじゃない、いい人だっているんだ。俺によくしてくれるひとだってたくさん……は言い過ぎだけど、割かしいる」

「割かしって具体的に？5・6人？」

「そんなとこ……かな。もうちょい多いかも」

「例のバイトだろ。まだやってんのか、ほとんどボランティアみてーなもんじゃねえか、よぼよぼのジジババにはした金でこき使われてよ。ハウスキーパーかっての」

憤然と馬鹿にすれば、ピジョンが哀しそうに目を伏せ傷付いた表情をする。

「そういう言い方よせよ、いいじゃないかだれも困らない

んだから。おじいさんやおばあさんばかりじゃない、若い人もいる。画家の人だよ、すごくない？」
「自称は別に」
「本物の画家だって。たぶん」
「どっちだよ」
「本人がそう言ってたから信じる。その人足が不自由で……食糧とか画材とかかわりにおつかいに行ってるんだ。優しくしていい人だよ、自分も元はよそ者だから同じ思いをしてる子をほっとけないってなにかと気にかけてくれるんだ」
ピジョンの声音にかすかに得意げな響きが混じるのが鼻につく。コイツ、いつのまに知り合いなんか作ったんだ？
俺の許しもなく勝手にくそったれた街の連中と親しくなりやがって……顔も知らない自称画家とやらに兄を独占されてるようで一瞬殺意が沸く。
スワローは突き放すような冷淡さと、すべてお見通しといった傲岸さでこきおろす。
「どうせそいつもろくでもねえやつで、ろくでもねえこと考えてるに決まってるさ」
「嘘ばかりつくなよ、見ず知らずの人にいちゃもんつけたらさすがに俺も怒るよ」
ピジョンがにわかに顔を引き締めスワローの知らない奴を庇う。こいつは人のために本気で怒る馬鹿ときた、他人なんか信じたって手痛いしっぺがえしくうだけだってまだわからねえのか。
少し脅してやるか。
「そのうちヌードモデル申し込まれるぜ、ただで」
「えっ」
「アーティスト気取りはご高尚な変態サマが多いからな。モドキのこじらせはタチ悪イ、アトリエ見学しねえかって言葉巧みに引っ張りこんでナニされちまうやら」
「お、俺が脱いでもつまんないし……」
「安く上がりゃいいんだよ、素材は二の次。川で溺れ死んだヒス女の絵を描くのに、モデルを浴槽に沈めて風邪ひかせた絵描きがいたじゃねーか。相手は肺炎になっちまったってんだからお気の毒様……なんだよその目」
「いや、お前が物知りだからびっくりした」
「低能扱いしてるとド玉かち割るぞ？　むかし母さんの客に自称アーティストの絵描きがいたろ、ヌード専門の。アイツに教わったんだ」
「彼は紳士だから心配ないよ、メインは静物画だって言ってたし……」
スワローのでたらめな脅しに尻すぼみに反駁するも、全否定できずこめかみに冷汗を伝わせる。
親切にしてくれる人もいる。

だが疎んじる人間もいる。
加害者ばかりを責められまい、追い剥ぎ強盗は日常茶飯事、警戒怠りなくしては自分と身内の命さえ守れない物騒な世の中だ。
だがピジョンが悪ガキどもに目をつけられるのは別の理由だ。ぶっちゃけコイツの泣き顔はたまらなくそそる、スワローはそれをよく知っている。なにせ彼自身が仕込んだのだから。
ピジョンのぐちゃぐちゃの泣き顔やみっともなく許しを請うさまを見ていると変な気になる。

なんていうか、むらむらしてくる。
めちゃくちゃにしてやりたくなる。

泣かせたい、組み敷きたい、押し倒したい。優しくなんかしてやるもんか、その声変わり途中のみっともなくざらつく声が枯れるまで、喘ぎすぎて喉が潰れるまで、めちゃくちゃに抉ってかきまわして突き上げて揺さぶってやる。
スワローは小馬鹿にしたよう鼻を鳴らし、シャツをひん剥かれた上モッズコートをはだけたみだらがましい格好で立ち竦む兄を、頭のてっぺんから爪先までじろじろ眺める。
「で、手も足も出ず袋叩きにされたってか」

「……」
邪険に舌を打つ。
「図星かよ。情けねえ」
「……」
「タマなしが」
「し、しかたないじゃないか。相手は大勢いたし……かないっこない。下手にはむかってひどくされるのはやだし、それに……」
スワローの首ったまにぎゅっとしがみつき、どもりがちにうつむいてしまう。
「痛いのはいやだ」
「ビビりが」
「俺も相手も……痛くされて痛くし返したらずっと終わらない。だったらガマンしてるほうがまだマシだ」
「自分ひとりガマンしてりゃまるくおさまるってか？」
気の優しい兄。優しすぎる兄。殴られても殴り返す度胸はない。スリングショットで動物を撃てない、蠅をはたき落とすのさえ躊躇する、生き物全般を殺せない。

『そんなことしたら可哀想じゃないか』
馬鹿げてる。
ヤるかヤられるか、この世はふたつにひとつだ。

なのにこの腰抜け腑抜けの平和主義者ときたら、なにかあれば無難に穏便に事を済ませようとする。詐術を処世術にして世間を渡ろうとする。いつまでも自分だけおキレイでいようとする。スワローはその性根が我慢ならない。

「痛ッあ!?」
下腹の痣の一つをつつけばピジョンが甲高い悲鳴を上げる。
「痛いか、ここ」
「さ、さわる前に訊けよ……痛いよ」
「じゃあこっちは？」
「痛っぐぅ、おま、わざとやってるな!?」
「ここと、ここと、ここ……ここはどうだ？　痛い？　どんくらい？　漏らしそう？」
次々と指圧する。子猫の眼をつく子どものような残酷さを発揮するスワローに、それでもピジョンは支えを欲して縋りつくしかない。
じきに足腰が立たなくなる。額に脂汗が滲む。下腹を圧迫される痛みに涙がでる。
「ッあ、ッふく、スワローやめ、ほんと痛いんだって……しゃれにならない」
「いい声で啼くな兄貴。今しか聞けない掠れ声だ。声変わりが終われば大人になっちまう」

仰け反る喉に唇を滑らせる。撓う喉に唇が這う。兄の喉の中央に生じた膨らみが不思議で、そこを鼻先でまさぐり唇でたどる。
「目立ってきたな」
「や、やめ、噛むな」
「頸動脈ごと噛みちぎってやろうか？　ブシューッて血が噴き出すぜ」
「冗談でも言うなよ、趣味が悪い……ヴァンパイアごっこする年じゃない」
「冗談かどうか何でわかる？　俺がテメエに手加減するとでも？」
「……っ……」
「喘ぎ声が聞けなくなるのが惜しいしやめとくか？　兄貴の声さア、ちょっとずつ変わってきたろ。最初の頃はもっと派手に痛がってたのに、今じゃ泣いてンのか媚びてンのかわかんねえ。甘ったるく潤って、いやいや言いながら股濡らすオンナみてえだ」
喉奥で笑いを転がされ、ピジョンがどん底に突き落とされた顔をする。
「媚びてなんか……ひっ、」
喉仏を甘噛み、尖った膨らみを舐め上げ、べっとりと唾液の筋をつける。

彼流のマーキング。一足先に第二次性徴を迎えた兄が日々大人になっていくのが気に入らない、自分を取り残し追い越して変化していくのが許せない。恐怖に震える声で抗うピジョンにかまわず、下腹に手をもぐらせ、不安定に泳ぐ腰を支える。

だしぬけに屈みこみ、痩せた下腹に舌を這わす。

「！　やっあ」

ぴちゃぴちゃ淫靡な水音をたて、ピジョンの腹をなめる。正確には痛々しい痣を。強く吸い上げ、軽く歯を立て刺激を与える。唾を丁寧にまぶして伸ばし、形よいへその窪みを窄めた舌先でほじくる。

パニックをきたしたピジョンが嫌々と首を打ち振り、拒む。

「スワローなに……なめなるなそんなとこ、汚い……シャワーも浴びてないのに」

「うえ、しょっぺえ」

「ほら言ったろ」

「変な味」

「汗かいたから……しかたない」

「へそに砂が入ってる」

楕円の穴から丁寧に砂をこそぎ、ぺっぺっと唾を吐く。

「風が強いし……砂を巻き上げて……もうよせよわかったから、俺が悪かったからやめてよ」

「悪いと思ってねーのにその場しのぎで謝んなよ」

「結局のとこお前は俺がなにしても気に入らないんだろ、だったらわけわからなくても謝るしかないじゃないか！」

とうとうピジョンがキレてヒステリックに泣き叫ぶ。

腰を引き寄せ、へそにキスをする。ピジョンがびくびくと跳ね、「あっあっ」と感じてる女のような声をだす。いや……感じてることにとまどう喘ぎ声か。どっちでもいい、同じことだ。

ギブアップと伝えるようスワローの肩を平手で叩き、叶えられないと絶望するや額を押し付ける。

おそらく本人に自覚はないのだろう、もっともっととねだるようぐりぐりと腰をおしつけ浅く弾ませる。体の正面を伝った汗がへその窪みに吸い込まれていく。もうへそをほじくられても乳首をつねりあげられてもナニをされても感じてしまう、ぐちゃぐちゃに蕩けきった顔は赤ん坊のように節操がない。開きっぱなしの口から涎を垂れ流し、それが目尻からあふれた涙と溶け混ざって、痛みと快楽のせめぎあいにたゆまず声を上げる。

「あっ、あっ、あっ」

こんなエロい顔を街のガキどもにも見せてやがるのか？

コイツがいじめられる理由がよくわかる。

暴力はセックスの手頃な代替品かつ手軽な代用品だ。

女を抱くのには金がいる、無理矢理犯すのはリスクが付き物。
世界経済の崩壊と同時に国家は解体され、治安を守る警察組織も消滅したが、代わりに台頭してきたのが西部時代を踏襲した賞金稼ぎ制度だ。
殺人や強盗や強姦、あらゆる犯罪被害者やその遺族、または彼らを後見する保険会社が犯人に賞金をかける。悪名を轟かせ大物になればなるほど広域に手配され、賞金額は釣り上がる。何十の銀行を襲撃し、何百人を殺戮した最凶最悪の悪党ともなれば、国中に顔写真付きの手配書がばらまかれる。
弱肉強食の掟が幅を利かせ、無法がまかり通る世紀にも、草の根から立ち上がり悪党を取り締まる制度はできたのだ。
報復は合法だ。復讐は認可された。
目には目を歯には歯を、やられた分はやり返す。もちろんやられた倍仕返したっていい、弱者を守る法がなければ悪党を守る法もないイーブンイーブンギブアンドテイクだ。
今や賞金稼ぎは大衆にとって最大の娯楽、生死を天秤にかけた最高にスリリングなショービジネスだ。
やり手の賞金稼ぎは栄光と名声を得てスターに比肩しうる人気を博し、悪逆非道の賞金首もヴィランとして熱狂的なファンを獲得し、両者のブロマイドがこぞって刷られて売られている。娯楽に飢えた大衆は、賞金稼ぎと賞金首の追走劇を賭けの対象にして楽しんでいる。
世界が一度滅びて、人間の品性まで西部時代に巻き戻ってしまったのだ。
心優しく仕返しを企む心配もまずない、町の人間や自警団にチクることもないよそ者のピジョンは、連中にとって殴る蹴るして憂さを晴らすストレスの捌け口になっている。
ピジョンの体に傷を刻んだ相手に殺意が芽生える。
兄貴を傷付けていいのは世界中で俺だけだ、俺以外の奴がコイツにさわるな、手を出すな。
傷だらけの貧相な体が、不健康に生白い肌を蝕む痣一つ一つが、生殺しの前戯に翻弄され喘ぐしか能のないピジョン自身への苛烈な暴力衝動を駆り立てる。
馬鹿な兄。カスな兄。愚鈍な兄。コイツと血が繋がってるなんて心底反吐がでる、なんにでも手あたりかまわず同情する無差別博愛主義者だ。それで自分を窮地に追い込んでたら世話がない。
貧乏くじを引くのが趣味のようなヤツ……むしろ貧乏くじを引くために生まれてきたんじゃないかと一抹の疑惑が過ぎる。

「ふぅ……っくぅ」
ピジョンの腰から力が抜けてへたれていく。膝が弱って挫け、スワローの腕に無気力に凭れかかる。スワローは皺の寄ったモッズコートの前を広げ、自分ごと包みこむ。いかがわしさを増す行為を隠し立てるにはもってこい、まだ本番にも至ってない前戯の段階で力尽きてもらっちゃ困る。挑発的に舌なめずりし下唇をぬらす。ぶかぶかのモッズコートの中でほそっこい四肢が泳ぐ。熱く湿った吐息が艶を帯びる。快楽と恥辱と懇願がごっちゃになった顔は涎と汗にまみれ、べちょべちょに濡れそぼっている。

エロい。
とてもエロい。
くそ、これじゃクソ兄貴の貧相なボキャブラリーを笑えねえ。

いけないことをしている自覚はあった。
母にバレたらまずいことをしている罪悪感で頭が一杯だった。
それなのにそれだからこそ、しちゃいけないと強く念じる理性に反して、すっかり敏感になった体が開発されていく。
全身の皮膚が性感帯に置き換えられたみたいで、ちょっとの刺激でも達しそうになる。
「はっ……、」
きつく目を瞑る。今自分がされていること、していることを忘れようと努める。辛い。いやだ。苦しい。気持ちよくなんかない絶対に。コイツは実の兄をてっとり早く突っこめる穴としか思ってない、等身大の肉オナホだ。
情けなさに瞼がじんわり熱をもつ。モッズコートの内側がもぞつく。熱い息が下腹で爆ぜ、くすぐったさを伴う微妙な快感に膝が抜ける。ズボンごと下着をずりおろせば、すっかりできあがった湯気が立つ。ピジョンのペニスは細長く形がいい。色が白くて上品だ。まだ淫水焼けしてない淡いピンクの亀頭は、独立した生き物のようにカウパーを滴らせている。鈴口に滲んだ先走りをすくいとり、笑いを噛み殺して囁く。
「いかにも未使用でございってかんじ」
「……っ、ほっとけよ」
「お前をオトナにしてやったのだれか忘れてねえよな」
「……ぐっ……」

覚えてる。忘れるわけない、あの夜の事は。
毎晩同じベッドを使う寝相が悪い弟がやけにひっついてき

て、体の裏表をしつこくまさぐってきた。寝ぼけているのかとしばらく放っておいたが卑猥な手遊びは止まず、遂に痺れを切らし離れろと注意すれば、耳の裏側に唇をあて、スワローはこう囁いたのだ。

『バレるのがいやならじっとしてろ』

背中にナイフをつきつけるような声に凍りつく。寝入りばなに弟がちょっかいかけてくるのは何度もあったが、その夜はいつもと様子が違った。カーテンを隔て、ほんの数メートル離れた場所で母が熟睡している。今していることがバレてはいけない、そうなったらもう三人で暮らせなくなる。ピジョンは家族を愛していた。物心ついた頃には父はおらず、やんちゃな弟と優しい母の三人でトレーラーを流してきた。母は優しかった。ピジョンとスワローに分け隔てなく惜しみない愛を注いだ。他人からの心ない中傷や迫害も、若く美しい母が慰めてくれればこそ耐えられた。母と離れるのは耐えられない。家族と別れて一人生きていく自信がない。だから……

「無理矢理剥かれて痛がってたな」

「はっ……、」

捏ねて、ねぶって、塗り広げる。意地悪な指遣いに感じてしまう体が恨めしい。

スワローの揶揄がトラウマとして身と心に刻まれた忌まわしい記憶を蒸し返す。

自分を後ろから抱き締めるスワロー、逃がさないようキツく絡めた足、無遠慮にズボンにもぐりこむ手……瞼の裏に生々しい悪夢の断片が突き刺さる。

じっとり汗ばんだ弟の手が、ボクサーパンツの中に忍んで幼いペニスを弄ぶ。恐怖で喉が詰まって声も出ない。ピジョンは胎児のように丸まって、シーツを掴んでただひたすらに耐える。一分一秒でも早く弟が飽きて、地獄のような生殺しの責め苦が終わってくれるのを願った。

ピジョンはもう知っている、神様は彼が嫌いなのだ。理不尽で不条理な世界では、彼の望みが聞き届けられた試しなどめったにない。彼の願いが汲まれる事など断じてない。どれほど狂おしく願って祈って信じて縋って尽くしても、伸ばした手はあえなくスワローに掴み取られる。

燕の方が鳩より断然速く飛ぶ。

翼に願いをのせて羽ばたいても、音の速さで飛ぶ燕にはかなわない。のろまな鳩は燕のしっぽ（スワローテイル）すら見ることがかなわない。

「弟に皮を剥かれて包茎捨てた気分はどうだ？」

今でも思い出す、うなじにこもる熱い吐息の感触。スワローの息が産毛を湿らす。

自分の身に異常な出来事が起きているのは理解できた、こんなの母さんも神様もお許しにならない、近親相姦と同性愛の二重の大罪を犯している。

白く華奢な手が発情した蛭のように蠢く情景は薄暗がりの中だといや増してみだらで、いけないことだと自戒してもペニスの疼きを止められない。弟が自分に欲情している事実も自分が弟に欲情している現実も信じたくない、目を閉じて暗闇に埋没して全否定したい、全身の血が先端に集中して密度を増していくのがわかる。弟の髪の毛がうなじの柔く弱い皮膚をくすぐり、神経がささくれだつ。まるで動物の交尾だとピジョンは感じたが、もし第三者がその情景を目撃していたら、マウントポジションを競う子犬のじゃれあいに近いと思ったろう。

ピジョンは知っている。スワローはよく知恵が回るし、一見華奢でもバネのように強靭な筋肉を秘めている。おそらく筋肉の密度からして違うのだ、単純な膂力や腕力ではかなわない。全力で暴れたら振りほどけたかもしれないが、スワローを怒らせる事に怯える自分がいた。キレたら手が付けられない。本当に殺されると覚悟したのも一度や二度じゃない。こんな度し難い乱暴者に奇跡みたいな美しい容姿をお授けになったのは神様の悪ふざけだ。少年と少女の美質を兼ね備えた外見で破廉恥極まりないインキュバスの振る舞いをする。根腐れした魂はどうしようもないから、せめて上っ面だけでも整えたのだろうか。

マスターベーションの経験はある。あるけれど、ピジョンのそれはまだ皮を被っていた。

自分で剥くのは恐ろしい。痛いのは怖い。はたして放置しておいていいものなのかどうか、質問できる身近な大人は母しかいないが、デリケートな話題すぎて思春期の少年は絶対に避けて通る地雷だ。羞恥で心が死ぬ。

正しいやり方もわからず、時がくれば自然に大人になると信じていた。

いつか愛する人ができて、その人と結ばれたら……シーツを被って悶々と膨らませていたピジョンの甘酸っぱい夢は、スワローに木っ端微塵に打ち砕かれた。

「なんでお前はいつもいつも」

過去と現在、二重のフラッシュバックが二倍の快感を促す。だめだ。もう無理、こらえきれない。ピジョンがぐすっとしゃくりあげる。目が真っ赤に充血し、透明な洟水がたれる。くたる膝を辛うじて支えてスワローに縋りつき、つっ

かえつっかえ訴える。
「なん、で、いづも俺のいやがるごとばっかりずる、んだ？にい〝さんを泣がせてだのじい、のか？」
「濁ってるぞオイ」
「うるざい……ふぅ〝うっ、だれのせいだと……」
「喉に息通さねーと過呼吸になる」
「ふぅうぅっ……はーっ、はーっ」
「ハーイよくできました、グッボーイ」
ピジョンが息を吹き返すまで待ち、戯れに後ろ髪に指を通す。兄弟で色合いの違う金髪、兄の方がしっとりと柔い触り心地だ。すっかり大人しくなったピジョンの髪の毛を梳きながら、唄うようにスワローは言う。
「勘違いすんなよ。テメエのいやがることをしてんじゃねえ、俺が気持ちいいことをしてるだけさ」
「お前が気持ちいいことって俺が痛がることばっかじゃないか。ドSなの？」
「反りが合わねえな。こっちは反ってっけど」
「こんなのもうやだ、たまには俺の言うこと聞いてよ……本当にいやなんだ、お前にいろんなとこいじくられると俺が俺じゃなくなる、体がむずむずして、ぞくぞく寒気がして……」
「蒸れまくって濡れまくって？」
「お前は遊んでるだけかもしれないけど……母さんたちの真似事で、手近な俺を捌け口にしてるだけかもしれないけど」
弟が怖くて逆らえない。これまでもずっと、これからもずっとコイツのオモチャにされるのか？　耐えて耐えて耐え抜いて、それで何が変わるんだ？　なんで俺ばっかり損をする、貧乏くじを引く、痛い目を見る？
俺はただ、スワローと普通の兄弟になりたいのに。
普通に仲良く笑い合いたいだけなのに。
「普通の兄弟は、こんなことしない……」
こみ上げる涙で視界が霞む。もう完全に諦めきって、嗚咽するだけになったピジョンの下方で、スワローの動きが次第に鈍っていく。
行為の打ち止めを告げたのは、不機嫌な舌打ち。
「……萎えた」
「え？」
信じられない。
真っ赤な目で瞬きするピジョンを手荒く突き飛ばす。モッズコートの裾を広げてぺたんと尻餅付いたピジョンの眼前、スワローは胸元のドッグタグを乱暴にひきちぎり、力任せに投げつける。
「あづっ……!?」

両手で頭を庇い丸まるも、遅い。スワローがむしりとった二枚重ねのドッグタグが頭に跳ね返る。
いばりくさって腕を組み、仁王立ちに踏み構えたスワローが吠える。
「ぐすぐすべそかきやがってマジでクソ萎えたぜ、勃つもんも勃ちゃしねえ。テメエはいっつもそうだ、もううんざりだ、いつだってテメエだけ被害者づらで泣き寝入りきめこみやがる！　言いたいことあんならはっきり言え、それでも兄貴かよ弟の顔色びくびく窺いやがって、同情誘う上目遣いむかつくんだよ!!」
理不尽だ。
理不尽すぎて返す言葉もない。
突然キレて罵倒して、一方的になじられて。
「なん……だよ、それ」
一体俺が何したっていうんだ？
「お前の気に障ることしたか？　お前になんかしたか？
お前はいっつもそうだ、いきなりキレて話にならない、挙句あんな、あんな恥ずかしいことまでして……全部ぜんぶタチの悪い嫌がらせだ、俺の嫌がる顔が見たいだけだ！」
「ああそうだよ悪いか畜生、なーにが平和を愛する小鳩ちゃん（リトルピジョン）だ、やられっぱなしで拳一発返せねェふにゃチン野郎が、俺に好き放題されてる時も町のクソガキにボコられてる時もおんなじアヘ顔してたんだろ！」
「アヘっ……顔なんてしてないぞ絶対、口は閉じてた！　じゃないと舌を噛む！」
「んじゃトロ顔だ、ボコボコに殴る蹴るされてトロトロにとろけきってよ！　どっちにせよマヌケ面だ！」
「マヌケ面は否定しないけどトロでもアヘでもない、本気で痛かったんだ!!」
「じゃ怒れよ！　キレろよ！　馬鹿にしてんだよ、犯してんだよ、テメエのチンポいじくり倒して無理矢理イかせようとしてる相手に哀れっぽく媚売ってんじゃねえ、それとも何かテメエはべそべそべそかいてりゃ許してもらえると思ってんのか、股ぐら蹴り上げて一発やり返す位の根性見せろよ!?」
カッとひん剥いた目に純粋な怒りが燃え立ち、赤錆色の虹彩が一際鮮烈に映える。
身の内で荒れ狂う激情が心臓を食い破ろうとでもしているような、ひどくもどかしげなやりきれない表情。
憤怒が爆ぜて、小柄で華奢な体躯が倍ほどに膨れ上がった錯覚をきたす。
ああ、綺麗だな。
コイツは怒ってる時が一番きれいだ。全身から炎を噴いてるみたい。

無軌道に無節操に、燃え上がる火の中にまっすぐ突っ込んでいく若い燕（ファイアスワロー）だ。